

所属	看護学研究科 看護学専攻 コミュニティ分野	修了年度	2020 年度
氏名	都田 直樹	指導教員 (主査)	堤千鶴先生

論文題目	精神看護学実習における指導者のストレスと教授行動の関連性 —精神科臨地実習指導者と一般科臨地実習指導者の比較から—
------	--

本文概要	
<p>【目的】 精神科単科病院で実習指導に携わっている精神科指導者と一般科病院で実習指導に携わっている一般科指導者におけるストレスの状況と、教授行動の関連性を比較分析し、精神科指導者の実習におけるストレス状況と教授行動との関連性を明らかにすることである。</p> <p>【方法】 実習指導者のストレスの状況を調査するために職業性ストレス簡易調査票を用いた。実習指導者の教授行動を、Zimmermanらが開発したEffective Clinical Teaching Behaviors(ECTB)の日本語版に改変した尺度を活用した。実習指導者のストレスと実習指導の関連性は、精神科指導者と一般科指導者に対して、2つの尺度間のSpearmanの相関係数を算出した。精神科指導者と一般科指導者のECTBに統計的な有意差があるかをMann-WhitneyのU検定で検証した。ストレス尺度についてもMann-WhitneyのU検定で検証した。</p> <p>【結果】 Spearmanの相関より、ECTB尺度とストレスとの結果は、精神科指導者で確認できた特徴として、ECTB尺度において学生への理解が高いと満足度も高いことがわかった。ECTB尺度では、一般科指導者の方が「実践的な指導」に統計的な有意差が多くみられた。ストレスについて、一般科指導者ではストレス要因と、ストレス反応において有意差がみられた。精神科指導者は、人間環境において有意差がみられた。</p> <p>【考察】 ECTB尺度とストレスとの順位相関係数から、精神科指導者に確認することができた特徴として、学生への理解が高いと満足度も高くなっていた。ECTB尺度について精神科指導者は、可視化しにくい患者の精神面のケアについて、時間をかけた教授行動により、学生が理解していくことをやりがいと推察された。ストレスに対しては、精神科指導者において、人間環境で統計的な有意差があった。人間環境の配偶者、家族、友人等と気軽に話ができている。また、配偶者、家族、友人等に困った時に、頼りになる人が多いため、一般科指導者に比べ人間環境が整っていることにより、ストレスを受けにくい環境下であると考えられる。精神科は、実習指導者を任される前の看護師経験年数が一般科と比べて長い。また、実習指導者の経験年数は、一般科と比べて短い。一方で、一般科指導者は、看護師経験年数が短いため、実習指導者との兼務を果たすことが困難であり、ストレスを感じやすいと考えられる。</p> <p>【結論】 1.ECTB尺度とストレスとの順位相関係数を計算した結果、精神科指導者では、学生への理解が高いと満足度も高かった。これは精神科指導者に確認することができた特徴であると示唆された。 2.ECTB尺度は、精神科指導者よりも、一般科指導者に、「実践的な指導」の教授行動が精神科よりも多かった。統計的に有意に高かったのは、病棟の特徴上、明確な臨床症状から、根拠に基づいたケアを体験・実践できる機会が精神科指導者に比べ、多いため教授行動が円滑に実践できていたことが示唆された。 3.精神科指導者は、一般科指導者に比べ人間環境が整っていることから、ストレスを緩和しやすい環境下であることが示唆された。</p> <p>【キーワード】 精神看護学実習 実習指導者 ストレス 教授行動</p>	